

未就学児とその家庭を対象としたオンライン漢字会の実践報告
—「年中行事×漢字」で海外でも漢字を身近に—
鈴木麻友(日本語キカク)

本発表では、発表者が4年半続けてきたオンライン漢字会の中で、特に有効だと感じている「年中行事×漢字」という掛け合わせでの漢字指導について、この活動の背景と具体的な活動内容の一部を紹介する。

発表者は、2020年春の世界的なロックダウンを機に、海外在住の日本にルーツをもつ子どもを対象に「オンライン漢字会」を開催し始めた。本会を開催した背景には、私自身が「日本語を広く、深く身につけるためには漢字学習が必須である」というビリーフを持っていたこと、2020年1月から参加しているマルチリンガル漢字指導法研究会で学びを深めていたことの2点がある。

日本語の上達には漢語の習得が欠かせない、というのは日本語教育に携わる人なら疑いの余地がないだろう。書き言葉での漢語の使用率は、約40～50%に上る(松下、2011)が、話し言葉では、延べ語数で見ると、和語85%、漢語10%、外来語2%と圧倒的に和語が多いものの、異なり語数で見ると、和語38%、漢語31%、外来語15%と割合が大きく変わり、この数字から話し言葉でも漢語や外来語の理解が不可欠となることが窺える(山崎・大村、2019)。日本語能力試験を見ても、N3までは生活語彙となる和語が中心、N2以上から漢語の割合が大きく高まる。

このように、日本語の習熟を目指すのであれば、漢語の習得、その基盤となる漢字学習は避けては通れない。しかしながら、継承日本語教育の現場においては、漢字学習が障壁となり、日本語学習自体を中断する例が多く見られる。それはなぜだろうか。

漢字学習においては、形・音・義の三要素に加え、漢字にまつわる語彙を学ぶことになる。日本在住児童の場合、日頃漢字そのものを目にしたたり、その漢字を使う語彙を既に知っていたりすることが漢字学習の助けとなる一方、海外在住児童の場合、語彙を含む全てを一度に学ばなければならぬことが漢字学習の大きな負担となっていると考えられる。

そこで、本会では、「種まき」としての上記要素をばらして導入すること、漢字から語彙を増やすこと、漢字への肯定的な意識を育むことを目的として、「年中行事」を柱として活動を行うことにした。「年中行事」を柱に選んだ理由は、毎年繰り返す目にする機会があることで再学習が見込めること、海外在住の家庭でも取り入れやすい文化的要素が多いため、家庭での日本語使用を豊かにすることが可能であることの2点である。

主な参加者は6歳以下の未就学児ではあったが、「漢字を学んだことがないこと」「画面の前で話が聞けること」のみが参加条件であったため、下は2歳から上は11歳までが参加した。各クラス5組(兄弟参加可)を上限としており、4名から8名が参加、低年齢の参加者には、保護者に同席するようにお願いしている。

初年度であった2021年は年間合計34回、2022年度以降は1年を3学期に分けて各8回から10回、活動を行っている。Zoomを使って1時間の活動を行い、復習用にプリントを送付している。

保護者からは、海外では自然に出会わない漢字を幼いうちから紹介することで、漢字への興味が高まり、新しい漢字との出会いを楽しめること、語彙力の向上、就学期以降の漢字学習への積極的な姿勢、日本文化への親しみが効果として挙げられた。

本実践の共有から、継承日本語学習への漢字のさらなる活用の可能性について、参加者の方々と共に探りたい。

参考文献

石井勲(1997)『石井式漢字教育 0歳から始める脳内開発』蔵書房

石井勲(2014)『改訂版 小学校に上がってからでは遅い! 石井式漢字教育 幼児はひらがなより漢字で6倍伸びる』コスモ21

近藤ブラウン妃美・坂本光代・西川朋美編(2019)『親と子をつなぐ継承語教育 日本・外国にルーツをもつ子ども』くろしお出版

中島和子(2015)『バイリンガル教育の方法-12歳までに親と教師ができること』アルク

松下達彦(2021)『複数の語彙リストの比較による日本語の常用語に含まれる日中同形漢語の量的検証』第3 回北東アジア言語教育学会発表資料
道村静江(2017)『読み書きが苦手な子もイキイキ唱えて覚える漢字指導法』明治図書
山崎誠, 大村舞(2019)『『日本語日常会話コーパス』モニター公開版の語彙』言語処理学会第25回年次大会発表論文集
GAKOU(2020)『漢字リズム音読～ハワイで生まれた漢字学習メソッド～』
マルチリンガル漢字指導法研究会 <https://www.learnjapanonline.com/multilingual-kanji/>